

平成 26 年 2 月 5 日

南の風 57

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

後半の3Pにトヨタは、6点しか取れず18点差をつけられてしまいます。しかし、依然としてオフェンスのシステムはよく機能し、シュートの入りだけが問題でした。

「戦評風に書きます。」

4Pの入りで、吉田（12番）がシュート決めた後、JXのオフェンスのリズムが乱れる。ここからトヨタが反撃を開始する。久手堅（25番）の3ポイントシュートで口火を切ると、シュートの入りがよくなる。栗原（24番）の3ポイントシュートが決まると、残り6分半で56対49の7点差まで縮める。さらにJXの大黒柱、渡嘉敷（10番）が4ファウルでベンチに下がると、フルコートのゾーンプレスで勝負をかける。しかし、JXにボールをうまく繋がれ、間宮（21番）にゴール下を決められ追撃もここまで。JXが2年ぶり18回目の優勝を飾った。

56号にも書きましたが、負けたとはいえトヨタの戦い方は我々指導者に、高さがあり個の能力も優れているチームに、どう挑むのかを示してくれたと思います。

ここでトヨタのディフェンスについて書きます。

入りは私が観たところ、マッチアップゾーンでした。ご承知のようにマッチアップゾーンは、ゾーンでありながらボールマンに対しては、マンツーマンで付くディフェンスです。JXの高さに対して有効です。また、3ポイントシュートに対しても完璧ではないにしろ、効果的です。

マッチアップゾーンには守るべき原則が少なくとも3つあります。

- ①ボールマンにはマンツーマンで付く。
- ②ボールマンには、一番近いプレイヤーが常にマッチアップする。
- ③ボールサイド（リングとリングを結ぶ線に対して）のスポットは必ず埋める。

以上です。

これを細かく説明することは今回はしません。私が観たトヨタのマッチアップゾーンについて触れます。まず気が付いたことは、ボールマンへのプレッシャーが強く、精度のよいパスがポストに入らなかったことです。そして次に、中のビッグマンにフルフロントで付こうと努力していたこと。もちろんポストの裏へのパスはヘルプです。このチームとしてのディフェンスが機能しました。また、外のショットに対しても、ボールマンへの反応が速く、簡単に3ポイントを許しませんでした。さらに、チームとしてディレクション（方向付け）が徹底され、5人のディフェンスが有機的に連動していました。マッチアップゾーンでは原則として、ボールマンを近いラインへと誘導し、ダブルチームしたり、プレイを限定させたりします。トヨタは、こういったシステムがよくできていました。このことは、ゾーンプレスにも生かされ、ディレクションからのダブルチーム、またはパスカットといったプレイに表れていました。2-2-1のゾーンプレスでは、ディレクションからのパスカットに、JXが戸惑っていた場面が何回もありました。トヨタのディフェンスは全員がシステムを理解し、よく訓練されていました。指導者にとって大変勉強になるものでした。

次号をお楽しみに。